〔研究ノート〕

イエスの笑い・十字架への道（道化と嘲笑）

滝　澤　武　人

イエスはユーモア感覚バツグンのたいへんオモロイ人間で，周囲にはいつも明るく楽しい笑いが満ち溢れており，その笑いとユーモアは死の直前まで絶えることがなかったようである。本稿の課題は，自らの死を覚悟してエルサレムに向かってからのイエスの笑いを，福音書の研究成果をふまえながら試論的に検討することである。なお，「イエスの笑い」については，すでに本論集第45号（2010年・序論），第46号（2011年・金持），第47号（2012年・論争）において論じている。以下における聖書のテキストは，『新共同訳』（日本聖書協会，2006年）から引用させていただいたが，部分的に変更・省略したり，私訳を揚げたりした個所もある。

なお，山浦玄嗣訳『ガリラヤのイェシュー　日本語訳新約聖書四福音書』（イー・ピックス出版，2011年）は，「ケセン語」（岩手県気仙地方の方言）を土台とし，「福音書を楽しく，親しみやすく，わかりやすいものとしてお伝えする」ためになされた「新しい形式の翻訳」であり，きわめて刺激的な「冒険」「実験」の試みである。何よりも生き生きとした会話体の面白さにあふれている。

たとえば，イエス自身に「俺」（ほとんどすべての個所）と言わせ，女性に「あたし」（ルカ15, 9，18, 3等）と言わせているだけでも大したものである。

キーワード：受難物語，十字架，道化，嘲笑

さらに，訳者が文中に挿入している「註釈文」自体が，イエスの笑いのすぐれた紹介となっている。すなわち，イエスが「ニッコリ笑って」,「カラカラとうち笑って」,「豪快に笑い飛ばして」,「楽しげにほほ笑み」等々である。ここには訳者の鋭い分析と豊かなユーモア感覚が十分に発揮されており，イエスの息吹がひしひしと伝わってくる。本稿においても大いに参照させていただいた。

1

イエスの師である洗礼者ヨハネはヘロデ・アンティパスによって斬首された。イエスもまた，自分がやがて殺されるかもしれないことを最初から覚悟していたであろう。もちろん，権力者側もイエスのような過激な人間をいつまでも放置しておくはずがない。

律法学者たちがわざわざエルサレムからはるばるガリラヤに派遣され，イエスと論争している（マルコ3,22，7,1)。マルコ福音書によると，かなり早い段階から「イエス殺害謀議」がなされていたようである（3,6)。さらに，ルカ福音書には次のように記されている。

> ちょうどそのとき，ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て，イエスに言った「ここを立ち去れ。ヘロデがお前を殺そうとしているぞ。」イエスは言われた。「帰って，あの狐に『今日も明日も，悪霊を追い出し，病気をいやし‥‥』と俺が言ったと伝えろ。俺は今日も明日も，その次の日も自分の道を進まねばならない。」（ルカ 13,31-33, 一部変更）

この「ヘロデ」とは洗礼者ヨハネの首を刎ねて殺したヘロデ・アンティパスである。ガリラヤ領主アンティパスが，自分の領土内で活動をつづけるイエスをも殺そうとしていたとしても不思議ではない。このテキストに登場する「ファリサイ派」は，おそらくアンティパスの権威をちらつかせながらイ

エスを恫喝しにやって来たのであろう。だがイエスはアンティパスを「狐」呼ばわりし，毅然として彼らを追い帰す。ここには自らの死を覚悟したイエスの断固たる決断がある。そして，その決断の強さが次の凄まじい発言に結びつく。あるいは，自らの内なる弱さから目をそらしたかったのだろうか。

> 体を殺しても，その後，それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。（ルカ 12,4）

権力者がいったん追及の手を伸ばしたとすれば，少なくともその領地であるガリラヤに居つづけることはできなかったであろう。イエスと弟子たちは何がしかの「逃亡生活」を余儀なくされたにちがいない。権力者の追手から逃れる場所は昔から「山」と相場が決まっている（マルコ13,14）。ヘルモン山（標高2814m）を中心とする今日のパレスチナ北部の山岳地帯が，イエス集団の絶好の隠れ場となりえたであろう。次の名文句はそのような逃亡生活（野宿）の中から発せられたのではないかと考えられる。

> 狐には穴があり，空の鳥には巣がある。だが人の子には枕する所もない。（マタイ 8,20）

語っていることは単純であり，自分には安らかに眠れる場所がないとみじめにぼやいているだけのように見れる。だが，決してそうではない。ここにはイエスの素晴らしいイメージ力とユーモア力がたっぷりこめられている。たとえ家や枕がなくとも，狐や鳥と共に自然（山！）の中で野宿すればいいのだ。あの「空の鳥・野の花」（ルカ12,24－28）の豊かな自然観とも密接に結びつくであろう。放浪の自然派詩人イエスの面目躍如というところである。

ヨハネ福音書に残されている次の二つの名セリフも，そのような逃亡生活の中で語られたものかもしれない。自らの死をはっきりと意識しながら，それを羊飼いや農民がよくわかるような日常的な譬えとして語っている。

良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく，自分の羊を持たない雇い人は，狼が来るのを見ると，羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い，また追い散らす。――彼は雇い人で，羊のことを心にかけていないからである。（ヨハネ 10,11-13）

イエスはまさに譬えの名手である。ここでは羊飼い（イエス）と羊（民衆）との間の「愛」に満ちた強い結びつきが強調されている（ヨハネ10,1－5およびルカ15,4をも参照）。後半部分の語り口は聴衆の笑いを誘ったであろう。だが，その笑いの中で，「良い羊飼い」であるイエスの死が予告されている。

一粒の麦は，地に落ちて死ななければ，一粒のままである。だが，死ねば，多くの実を結ぶ。（ヨハネ 12,24）

これも農民ならば誰でもすぐに理解できる譬えである。すべての農民が待ちこがれる豊かな収穫の歓びにイエスの死が重ねられており，同時に「死」をも超越する「希望」のイメージすら浮かびあがってくる。マルコ福音書４章の種子と収穫に関する三つの譬えと通ずるものがあり，おそらくイエス自身の発言と考えてよいであろう。なお，同じヨハネ福音書15章３節の「友のために自分の命を捨てること，これ以上に大きな愛はない」は，「愛」の神学が強調されており，ヨハネによる挿入であろう。

2

イエスの「逃亡生活」がどのようなものであり，どれほどつづいたのか分からない。だが，ある時イエスは意を決して，パレスチナ最北部の山岳地帯「フィリポ・カイサリア」（マルコ8,27）から出発し，一路エルサレムへと向かう。その途中で，マルコはイエス自身の「受難予告」を三度くり返している（8,31，9,31，10,33-34）。これはマルコのきわめて意識的な編集作業であ

るが，権力者とイエスをめぐる歴史的状況を的確に反映していると考えてもよいだろう。

イエスにとってそれは文字通り「死出の旅」であった。自らの死をはっきりと覚悟し，弟子たちにもそれを明瞭に告げてエルサレムへと旅立ったのである。次の痛烈な言葉は，その出発の折に弟子たちに語られたものなのかもしれない。

> もし誰かが俺について来ようと思うならば，自分の十字架を背負え！（マルコ 8,34,私訳）

また，いわゆる「十二人」が選ばれた（最後まで残った？）のも，そのような厳しいエルサレムへの「旅」の途上であったのかもしれない（佐藤研『最後のイエス』ぷねうま舎，2012年，192頁）。いずれにせよ，このような厳しい状況の中で「十二人」を選んだ行為自体，イエスのユーモア精神の賜物であろう。「十二」という数字が「イスラエル十二部族」を象徴するものだからである。

さて，イエスはなぜわざわざエルサレムに向かったのだろうか。おそらくイエス自身のいわゆる預言者的な美意識によるものであろうか。イエスはすでに民衆から「預言者」として迎えられていた（マルコ6,15など）。自分でもそれを充分に意識していたはずである（マルコ6,4）。そして，預言者とはまさにエルサレムで打ち殺されるべき存在なのである（ルカ13,34，マルコ12,1－9）。イエスとしては，エルサレムから遠く隔たった場所で逃亡生活をつづけている場合ではなかったのだろう。まして，そこで絶命することなどまったく考えられなかったのだろう。それもまたイエスの予言者的美意識である。また，先に示した「良い羊飼い」や「一粒の麦」のような殉教意識もあったのだろうか。

かくて，イエスがエルサレムに出現する（マルコ11,1－11）。折しも世界中から多くのユダヤ教徒が集まる過越祭の時を選んだ，きわめて意識的な行

動であった。だが，その姿はどう見ても英雄の姿ではない。なんと「子ろば」にまたがって登場したのである。それは実際の歴史的出来事と考えてよい（大貫隆『イエスという経験』岩波書店，2003年，195頁以下）。弟子たちが村の中から一匹のろばを探してきたというのも事実であろう。おそらくイエス自身がゼカリヤ書9章9節の一節を意識して，そのような行動をとったのであろう。しかしながら，その預言の言葉をそのまま行動に移したということが重要である。そこにイエスの骨太のユーモア感覚のすべてがこめられている。

それは一種のデモンストレーション（示威行動）であった。英雄や王はふつう「白馬」にでもまたがって颯爽と舞台に登場するのが通例であろう。だが，すでに預言者と称されていたイエスは，なんと「子ろば」に乗って右に左に揺られながらやって来たのだ。エルサレムの民衆はやんやの大喝采を送ったという（マルコ11,8－11）。イエスの得意な笑い戦略が一挙に大成功を収めた瞬間である。「子ろばのイエス」というパフォーマンスは，「イエスの笑い」という視点からも大いに注目されなければならない出来事である。

そしてもう一つ。「ろば」というイメージが「道化」や「愚者」と密接に結びついていることを忘れてはならない。ここは「ドン・キホーテ」を想起していただければよいだろう。エルサレム入城から十字架の死にいたるまで，イエスは一貫して道化・愚者として馬鹿にされ嘲笑されている。イエスはまさしく「聖なる愚者」を演じているのである（バーガー『癒しとしての笑い』森下伸也訳，新曜社，1999年，327頁以下）。

3

エルサレムにおけるイエスの大胆なパフォーマンスがもう一つある。神殿から商人たちを追い出すいわゆる「宮清め」の物語である。おそらく，「子ろばの入城」にそのまま継続した行動だったのであろう（渡辺英俊『片隅が天である』新教出版社，1995年，98頁以下）。

それから，一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り，そこで売り買いしていた人々を追い出し始め，両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。また，境内を通って者を運ぶこともお許しにならなかった。そして，人々に教えて言われた「こう書いてあるではないか『わたしの家は，すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが，お前たちはそれを強盗の巣にしてしまった。」（マルコ11,15-17，一部変更）

最後の17節の発言は，イザヤ書とエレミヤ書の混合引用であるが，少なくともイエスがそのような聖句を意識していた可能性は大いにありうる。「お前たちはそれを強盗の巣にしてしまった」はイエスらしい凄まじい発言である。だが，ここで注目しなければならないのは，前半部分の狂ったような行動である。このような突発的な行動はまったく理解不可能なものであっただろう。「子ろばの入城」と同じように，イエスはここでもまた「聖なる愚者」を演じているのである。そして，その行動自体がエルサレム神殿体制全体に対する激しく鋭い批判となっている。この事件の直後に，神殿権力者たちがイエス殺害を謀ったのも当然であろう（18節）。なお，おそらくこの行動がいわゆる「権威論争」（マルコ11,27－33）を引き起こしたのであろう。そして，その論争にもイエスの痛快な笑いが含まれている。

もう一つある。イエスは決してエルサレムに泊まらない。夕方になると必ず，街の外へと出て行く。すなわち，「ベタニア」（マルコ11,11）や「都の外」（マルコ11,19）へと出て行ってしまう。ルカ福音書では，「オリーブ畑と呼ばれる山」（ルカ21,37）に向かっている。すなわち，ユダヤ教徒にとって聖なる都であるエルサレムをわざわざ回避・忌避しているのである。これもまたきわめて不思議な行動であると言わねばならない。

イエスにとってエルサレムとは，「預言者たちを殺し，自分に遣わされた人々を石で打ち殺す」（マタイ23,37）都であり，まさに批判すべき対象にほかならないのである。神殿から出て行く時，イエスは痛烈な神殿崩壊の予告

をなしている。

> これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない（マルコ13,2）

それにしてもこの発言はあまりにもラディカルすぎる。もちろん，ユーモアのかけらもない。だが，ここには「受難」や「神殿」をはるかに超越するイエスの痛快で断固たる姿勢が見いだされるであろう。そして，その圧倒的超越性がユーモアや滑稽を生みだす可能性を秘めている（バーガー，前掲書，第14章）。

4

いわゆる「最後の晩餐」の物語（マルコ14,22－25）で，イエス自身が語った言葉と認められるのは，25節だけであろう（大貫，前掲書，201頁以下）。

> アーメン。神の国で新たに飲むその日まで，ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。（マルコ 14,25, 一部変更）

もちろん，これも明確な「受難予告」である。しかもその受難はすでに切迫している。まさに「最後の晩餐」なのだ。しかしながら，そのような深刻で緊張した場面においても，イエスのユーモア精神はやはり旺盛であったようだ。

まず，冒頭の「アーメン」である。「アーメン」とは，元来ヘブライ語で「真に」，「確かに」という意味であり，他者の言葉や祈りに賛同し，最後に一同で厳粛に唱和する決まり文句である。「その通り！」とか「異議なし！」というところだろう。それなのに，なんとイエスは自分の発言の冒頭で勝手に「アーメン！」と唱えてしまうのだ。この「アーメン言葉」は福音書のあち

こちに見いだされ，いずれもイエスらしい痛烈な皮肉とユーモアがこめられている。それをイエスは「最後の晩餐」においても用いたのである。このような緊張した場面で「アーメン」という一語を聞いただけで，弟子たちの心の中に苦笑が湧きおこっていたにちがいない。

次に，「神の国」である。イエスはここで自分が神の国に入ると素朴に信じ切っている。イエスにとって神の国とは，社会の最底辺で苦しむ人々のものであり，そのような人々のために生きてきた自分自身も，当然神の国に入るのである。そこには何の理由もない。イエスはきわめて楽天的にそう思いこんでいるだけなのである。そして，その神の国でもまたイエスはやはり「酒」を飲む！　これもまた実にイエスらしい発言で微笑ましい。さすが，敵対者たちから「見ろ，大飯食らいの大酒飲み」（マタイ11,19）と批判されていた人物だけのことはある。思わずニヤリとしてしまう弟子もいただろう。

さらに，もっと単純に「ぶどう酒」と言えばいいのに，ちょっと気どってわざわざ「ぶどうの実からつくったもの」などと言うところがまた憎い。「新しいぶどう酒は，新しい革袋に入れるもの」（マルコ2,22）などと酒について蘊蓄を傾けていたはずなのに，さすがのイエスもこんな場面ではっきりと「酒を飲む」とは言えなかったのだろうか。これもまた新しいイエス像が期待できそうな場面である。

「最後の晩餐」の後，イエスは弟子たちとともにゲツセマネの園に行く。マルコ福音書における「ゲツセマネの祈り」（マルコ14,32－42）の構成は，32－38節が原始キリスト教会の伝承，39－42節がマルコの付加と考えられる。したがって，死を目前にしたイエスが「ひどく恐れてもだえ始め」（33節）や「わたしは死ぬばかりに悲しい」（33節）と語ったり，弟子たちが三度も眠っていたことなどは，いずれも史実とは認められない。

しかしながら，イエスの「最後の祈り」の次の言葉については歴史性を認めてもよいであろう。なお，この前後の省略した部分には祈りの定型が示されており，原始キリスト教会による挿入と考えられる。

アッバ（お父ちゃん），この杯を取りのけてください。（マルコ 14,36，私訳）

冒頭の「アッバ」とはアラム語で「父」を意味しており，もともとは家庭内で幼児が父親に向かって発する親しい呼びかけである。いわば「お父ちゃん」や「おとん」というところであろう。イエスはそのような言葉をなんと神への呼びかけに用いたのである。これはまさに「他に類例のない」驚天動地の「放れ業」（エレミアス『イエスの宣教』角田信三郎訳，新教出版社，1978年，122頁以下）と言わねばならないであろう。まさに「笑いのイエス」の面目躍如というところである。敬虔なユダヤ教徒にとっては，まさに不謹慎きわまる破廉恥で赦しがたい冒涜的発言としか考えられなかったにちがいない。山浦訳では，「とど～，とど～，父（とど）さまア！」とまるで歌舞伎の名場面でも浮かんできそうである。

四つの福音書で「アッバ」が登場するのは，マルコのこのテキストだけである。マタイ，ルカ，ヨハネの平行記事はいずれもこの「アッバ」を削除し，「父」とのみ記している。おそらく，イエスが神を「アッバ」と呼ぶような衝撃性に耐えられなかったためであろう。逆に言うと，イエスが神を「父」と呼んでいる他の多くのテキスト（主の祈り，放蕩息子，子供の祝福，わが子にパンを与える父親など）も，もともとはやはり「アッバ」が使われていたものと思われる。そして，パウロも「アッバ」を二度明記している（ローマ8,15，ガラテア4,6）ので，やはりこれはイエス自身にまで遡りうる発言であったのだろう。

「神」のことを「お父ちゃん」と呼んではばからなかったイエスには，「アーメン」の場合とまったく同じように，伝統的ユダヤ教の神理解や祈りに対する痛烈な批判と豊かなユーモア精神を強く感じざるをえない。イエスとしては，権威主義的で厳格な父親像のみによってとらえられる「神」に我慢することができなかったのだろう。厳しい「父なる神」をそれほど強調したければ，いっそのこと「お父ちゃん」と呼んでみたらどうなんだという気持ちだっ

たのだろうか。ここには現代における新しい神理解への大いなる可能性が開かれている。

さて，もう一度テキストにもどろう。もちろん，イエスが死の恐怖に捉われ，神に救いを求めたとしても不思議ではない。しかしながら，このような危機的・絶望的状況にもかかわらず，イエスがあえて「アッバ」を使ったことを見のがしてはならない。ここでイエスは自らの死をすでに客観化・相対化している。「神」を「お父ちゃん」と呼ぶイエスによって，弟子たちの中に「驚き」とともに「苦笑」が湧き起っていたにちがいない。「お父ちゃん」という言葉自体に温かい父性愛が含まれているからである。

さらに，ここでもまた単純に「死を免れさせてください」と言えばすむのに，わざわざ「この杯を取りのけてください」などと言う。「ぶどう酒」を「ぶどうの実からつくったもの」と言い換えたのとまったく同じ手法である。イエスはどこまでもちょっときどった詩人なのだ。なお，「杯」とは「死」と「苦しみ」のシンボルである（マルコ10,38－39）。

イエスの祈りはきわめて簡潔で率直である。「主の祈り」においても，ほんとうに必要なものを実に具体的に（あからさまに）要求するだけである。すなわち，「パンを与えてください！」，「借金を帳消しにしてください！」（マタイ6,11－12, 私訳）である。すると，イエスの最後の祈りにおいても，おそらく「この杯を取りのけてください！」だけだったのだろう。死の直前の祈りにおいても，イエスは自分自身の要求を神に向って，そのまま率直に告げるだけである。ここにもイエスの飛び切り上等のユーモア精神が見いだされる。

マルコ福音書では，この祈りは弟子たちから少し離れた所で祈られたとされている（35節）が，むしろ弟子たちの面前でなされたと考えたほうがよいかもしれない。この伝承が弟子たちを通して原始キリスト教会に伝えられているからである。もしかすると，マルコもそこに居合わせていたのかもしれない（マルコ14,51の若者がマルコだった？）。弟子たちの間にはきっと複雑な微笑が広がっていたはずである。

5

「イエスの笑い」はここで途絶える。これにつづく受難物語の中で「史実」と想定されうるものはわずかしかない。すなわち，ゲツセマネの園の辺りで逮捕されたらしいこと，ユダヤ教最高法院とローマ総督官邸で死刑判決が下されたらしいこと，そしてゴルゴタ（されこうべ）の丘で，ローマ帝国への政治的反逆者として十字架刑で処刑されたことぐらいである。そのほかのことは歴史的には一切確認できない。

「弟子たちの逃亡」,「ユダの裏切り」,「ペテロの否認」,「バラバの釈放」という有名な物語が，はたして史実なのかそれとも創作なのか……また，大祭司やピラトの直接的な尋問があったのかどうか，もしあったとすればその内容がどのようなもので，イエスがどのように答えたのか……一切わからない。それらはすべて闇につつまれている。確実なことはただ一つ，イエスが十字架刑で処刑され殺されたということだけである。なお，受難物語全体の歴史的検証については，クロッサン『誰がイエスを殺したのか』(松田和也訳，青土社，2001年）が詳しく興味深い検討をなしている。

イエスは断末魔の絶叫を残して死んだという（マルコ15,37)。もちろんそこにはいかなる「笑い」もない。十字架刑の判決を言い渡されてから，イエスは完全黙秘に徹していたようである。イエスにもたらされたのは，兵士たちによる「鞭打ち」と「侮辱」と「嘲笑」のみである（マルコ15,15－20)。罪状書きに「ユダヤ人の王」と記したのも，イエスの左右に二人の強盗を十字架につけたのも（マルコ15,26－27)，イエスに対するおちょくりである。そして，十字架上のイエスには，さまざまな「侮辱」と「ののしり」と「嘲笑」の言葉があびせかけられた（マルコ15,29－32)。民衆への「見せしめ」こそが十字架刑の目的なのである。イエスはまさに死にいたるまで「聖なる愚者」を演じさせられた。

しかしながら，それだけではなかったはずである。ローマ総督官邸の兵士

たちによってさまざまな「暴行」（拷問）が加えられたにちがいない。ヘンゲル『十字架――その歴史的探求』（土岐正策・土岐健治訳，ヨルダン社，1983年）が指摘するように，「磔刑は，刑吏がその気まぐれとサディズムを思う存分発揮させることのできる刑罰」であり，「これに様々な『なぶり（ludibria）』が加えられた」のである。

処刑場への道に引き出された時，イエスには十字架の横木を担いで歩く体力はすでに残されておらず，キュレネ人シモンが代わりにそれを担がされている（マルコ15,21）。また，イエスはおそらくかなり頑健な肉体と精神を持った男であっただろうにもかかわらず，十字架につけられてからわずか六時間ほどで息絶えてしまった。おそらくこれも兵士たちから受けた「暴行」の凄まじさを示しているのだろう。

最後に，イエスの絶叫の死の直後に百人隊長が発したという，「本当に，この人は神の子だった」（マルコ15,39）という謎めいた発言に言及しておきたい。マルコ福音書の文脈において，この言葉は「神の子」イエスへの「信仰告白」となっている。義人の死が敵方の責任者をも改心させるという文学的技法である。しかしながら，ローマ帝国の死刑執行責任者である百人隊長が，イエスの死の直後に突然キリスト教に回心するなどとはとうてい考えられない。だが，そのような言葉が百人隊長の口から発せられたことは，決して消し去ることのできない事実だったのであろう。では百人隊長はその言葉をもともとどのような意味合いをもって発したのだろうか。

もう一度マルコ福音書15章24－39節の文脈をたどりなおしてみよう。イエスを十字架につけて，「ユダヤ人の王」という罪状書きを記したのも，その左右に二人の強盗を十字架につけたのも，百人隊長を責任者とする兵士たちであった（24－27節）。それは「からかい」と「おちょくり」によるものである。そして，イエスが苦しまぎれに何かを叫んだ時に，「そら，エリヤを呼んでいる」，「待て，エリヤが彼を降ろしに来るかどうか，見ていよう」と言った（マルコ15,35－36）のも，おそらく兵士たちであったのだろう。それもまた「からかい」や「おちょくり」によるものだろうが，彼らの心の中

に一瞬何がしかの緊張と不安が走ったのも事実であろう。「そんなことは絶対にありえないが，もしエリアが本当にイエスを助けにやって来たら……」。

だが，イエスは次の瞬間あえなく息を引き取る（37節）。兵士たちの緊張と不安が一気に解放される。そして，百人隊長の発言はそのような状況の中でなされたのであろう。それはまさに「からかい」と「おちょくり」の延長そのものにほかならない。すなわち，次のようなニュアンスの発言であったのだろう。「おい，みんな，笑わせるじゃねえか。せっかくエリヤとやらが助けに来るというから楽しみにしていたのに，あっさりとくたばっちまいやがったぜ。こいつは本当に人騒がせなとんだ〈神の子〉だったぜ！」そこには兵士たちのどす黒い嘲笑の渦が，いつまでも沸き起こっていたにちがいない。